

トカラ語 A «*Bṛhaddiyuti-Jātaka*»の部派帰属について 荻原 裕敏

[キーワード]

トカラ語 A、*Bṛhaddiyuti-Jātaka*、*Mahājātakamālā*、説一切有部

[要旨]

トカラ語 A 断片 Nr.19a1-25b6 (= THT652a1-658b6) には、「*Bṛhaddiyuti-Jātaka*」と称されている本生譚が語られている。この物語のパラレルとしては、Emil Sieg (1944) によって指摘された *Mahājātakamālā* 所収「*Bṛhaddiyutikumbhakārāvadāna*」が、既に知られている。本稿では、主に、漢訳仏典に見られるパラレルとの比較を通じて、トカラ語 A による物語が、有部に伝えられた伝承に基づいていると考えられる点について検討する。

0. トカラ語 A «*Bṛhaddiyuti-Jātaka*»について

トカラ語 A 断片 Nr.19a1-25b6 (= THT652a1-658b6) は、*Shorchuk* でドイツ探検隊によって発見された断片であり、転写は *TochSprR(A)*: 15-20 で出版された。ここには、トカラ語学では「*Bṛhaddiyuti-Jātaka*」と称されている本生譚が、「*Puṇyavanta-Jātaka*」に続く部分として語られている。転写が出版された時点では、この物語に対するパラレルは不明であったが、トカラ語 A 断片 Nr.1-25 (= THT634-658) のドイツ語訳を出版した際、Sieg は、Lang (1912) で出版された梵語写本 *Mahājātakamālā* 所収の「*Bṛhaddiyutikumbhakārāvadāna*」が、パラレルとして存在しており、トカラ語 A のものは、梵語のものと重要な点で一致している事を指摘した¹。この物語の一部 (Nr.19b3-21b6) は、Thomas (1964: 23-24) にも読本として採用されており、トカラ語学では良く知られたテキストとなっている。本稿では、漢訳仏典中に見られるパラレルとの比較を通じて、トカラ語 A による物語が、有部に伝えられた伝承に基づいていると推定される点について検討する²。

1. トカラ語 A «*Bṛhaddiyuti-Jātaka*»和訳

前節で紹介したように、既に Sieg (1944: 23-30) によって、この物語全体のドイツ語訳が与えられているが、本稿では、パラレルとの比較を行う際の便宜を考慮し、改めて和訳を与える。以下の和訳文は、Sieg によるドイツ語訳に基づき、その後のトカラ語研究の成果

¹ Sieg (1944: 23, Anm.1)。

² 本稿では、特に記さない限り、「有部」「説一切有部」を、所謂、根本説一切有部を含めた広義の説一切有部の意味で用いる。なお、説一切有部・根本説一切有部の問題については、榎本 (1998, 2000, 2004) を参照されたい。

も参考にして作成したものである³。ただし、この写本には破損した箇所があるだけでなく、意味の不明な部分もあり、完全な訳を提示する事は困難である。トカラ語 A の物語は、漢訳・梵語・チベット語のものとは異なり、トカラ語 A 仏典の中でも良く見られる散文と韻文が交互に現れる形式で書かれている。

[Nr.19]

少しずつ福德を積みながら、人々の命が 120 歳に及ぶ時、釈迦牟尼という名前の、如来・阿羅漢・正しく全ての法を知る者・師仏陀が世に現れた。さて、この阿羅漢の生まれと出自は、以下のものであった。摩訶摩耶という名前の王妃が母であった。淨飯という名前の王が父、羅怛羅という名前の息子がおり、阿難陀という名前の侍者、舍利子と大目犍連という名前の、二人の優れた弟子が彼にはいた。この阿羅漢は、(この時)、教えられるべき人々を解き放ちながら、侍者阿難陀と共に、廣熾 [= *Brhaddyuti*] の … へ、夜、休む場所を求めて赴いた。この阿羅漢は、

|| *Etvam* ||⁴

百劫の間の福德の結果として、無量的那羅延の英雄の力を持ち、その装飾・特徴によって、見るに値すべきものに勝る身体を有していた。国から国へと渡り歩いているうちに、風による病気の苦しみが彼を襲った。1

それから、かの阿羅漢、釈迦牟尼、神々の神仏陀は、この病気の苦しみの最中にありながら、世界に大きな利益を与えんと欲し、阿難陀に言います。さあ、阿難陀よ。仏陀の言葉に従い、陶師の廣熾に言いなさい。師仏陀は、風による病気の苦しみを受けており、温かい水・胡麻油を欲している。

[Nr.20]

そのように致します、尊者よ。答えてから、阿難陀は陶師の廣熾の下に行き、言います。

|| *Chandakanivartnam* ||

(私達のための)避難所であり、希望でもある、師、仏陀釈迦牟尼は、風の病気による苦しみに犯されている。廣熾よ。彼は、(体を)洗うための温かい水と塗るための胡麻油を欲しておられる。あなたは福德を欲しており、仏陀に信頼されている。彼に対して貢献をなさい。1

仏陀の名前を聞き、廣熾の全身の毛は逆立った。すぐにベッドから(起き上がると)、目に(涙を浮かべ)、合掌をして、大いなる敬意を込めて言います。どうか、言ってください。尊者、阿難陀よ。(仏陀という)名前の(方は、どなたなのですか)。

|| *Apratitulyenam* ||

私は仏陀の名前を聞き、私の思いは掻き立てられ、(私には)善行に対する願望が(生じた)。

³ 以下の和訳文中、()は、断片には残存せず、校訂者や筆者によって補われた部分である事を示している。また、… は、欠けている部分・訳が困難な部分である。

⁴ || 名詞 (*Locative*) || に続く部分は韻文で書かれている。

私の心は)、喜びで(躍り上がった)。障害の下で眠っていた世間で、師仏陀が英知を備え、目覚めたのを、(私は見るだろう)。阿難陀よ、私に語って下さい。かの仏陀とは、誰なのですか。そして、どのようなものなのですか。彼は何と言っているのでしょうか。彼は、私にどんな命令をしているのでしょうか。何劫もの間にわたる生において、かつて聞いた事のない名前を、私は聞きました。そのため、私はあなたにお尋ねします。仏陀とは、誰なののでしょうか。どのようなものなののでしょうか。1

阿難陀は言います。それは以下のようなのです。彼は、名声を有する者・如来・阿羅漢・正しく全ての法を知る者・道徳的に行いと英知を備えた者・世間を知っている者・勝れる者がなく、征服されるべき者達を導く者・衆生と神々の神・仏陀・名声を有する者・道徳的に行い、努力、瞑想、

[Nr.21]

英知において、全ての衆生を凌いでおり、三十二相・八十隨好を備えた、飽く事なく見ることができ、仏陀の徳を纏った身体によって飾られています。もしも、彼が出家していなかったならば、彼は四洲の支配者・七宝を備えた轉輪王となっていたでしょう。また、私もあなたも、(彼の)召使となっていたでしょう。今、彼は出家し、正しく全ての法を知り、全ての疑いを(追い払い、確信を与え)、全ての疑問を絶っています。今、その阿羅漢の(仏陀の徳を纏った身体を)、風による苦しみが、道を行く最中、苦しめています。そのため、温かい水と胡麻油が必要とされています。…。

|| (Kāpñe)kkanaṃ ||

息子に対するように、懇願の念ある師仏陀は、私をあなたの下へと遣わしました。そこで、あなたは、私を彼の(仏陀の下へ) …。自ら、油と温かい水を持って行きなさい。自分の目で師を見なさい。あなたの両目は成果のあるものになるでしょう。あなたの人生は、成果(を伴う)でしょう。1

驚いて、陶師廣織は考えます。ああ、このような善行を備えたならば、人生は何と驚くべきものであろうか。それから、陶師廣織は、父・母・兄弟・妻・息子達とともに、香・花・温かい水・胡麻油(を持って)、釈迦牟尼、神々の仏陀がおられる場所へと赴いた。仏陀、神々の(仏陀は)、

[Nr.22]

陶師(廣織)が大いなる喜びを抱いて、やって来たのを見た。そして、すぐに、彼に大いなる善行を引き起こすために、… (蔓のかかった木)のように、上着一つを着たままでいた。さて、それは、一体、どのようでありましょうか。

|| Śeṣaṣi niṣkramāntaṃ ||

如意宝珠(で飾られ) … 宝石でできた島が、宝石によって飾られている如く壮麗で、花によって飾られ、(天の) …、灯りによって飾られた金の木の如く、天の宝石でできた柱のように留まっており、(三十二相)・八十隨好で飾られていた。かさを作った太陽が、

一尋の幅の光線によって包まれ、… 慈悲深い … 。1

これを見て、廣熾は幸福で押しつぶされたように驚いて(考えます)。世界で輝かしいと数えられているもの、その全てが、この身体に、(はっきりと見え)、… 、まるで、天の鏡において、全ての姿が … 。

|| *Subhādrenam* ||

以前の仏陀、独覚、(偉大な聖者)、転輪王、大洋、海、龍の王、偉大な阿修羅、… 、宝でできた島、… ⁵、如意宝珠、寺院、僧院、施堂、… 、贈り物を与えながら。(1)
天の山・妙高、天の四人の王、*Pārijāta* の樹、*Sudharmā*、*Vaijayanta*、… 、*Skandha*、(*Viṣṇu*)、*Mahēśvara*、馬、乗り物、象、*Yama* 神、兜率、

[Nr.23]

淨居天までも、(全ての)輝かしいものが、その仏陀の徳を纏った身体に、はっきりと見えている。2

それから、廣熾は並外れた大きな喜びを抱いて、阿羅漢・釈迦牟尼仏陀の側に行き、大いなる敬意と尊敬の念を込めて、合掌をして、釈迦牟尼の両足を拝んで、飽く事なく見ることが出来る仏陀の徳を纏った身体に対して(右旋を行い)、仏陀に対して敬意を示します。

|| *Maitram* ||

尊者よ。もし、私のような者が尊敬に値するのなら、あなたの輝かしい身体に触れる事 … 、お許し頂きたい。私は、自らの手で仏陀を濯ぎたい。願いをかなえる者に、願いを与えておられるが、(私にお許し頂けますか。1)

(それから、快い声で)釈迦牟尼仏陀は言います。息子よ、そのようにしなさい。自ら仏陀の(身体)を洗いなさい。(それから、廣熾)陶師は、仏陀から許しを得て、喜んで、仏陀の側に進みながら(?), (彼の手を)見ました。(その手は) … 、粘土の作業によって、固く、荒れていて、乾いており、粘土がついていて、冷たく、仏陀の身体に触れるには適しておりません。そこで、恥じ入り、引き下がりました。そして、目に涙を浮かべて、師仏陀の身体を見つつ考えます。

|| *Yarāssinam* ||

仏陀の身体には、全ての輝き・気品・柔らかさ・(愛らしさ)が存在している。粘土の仕事をしている私の両手は、乾いていて、荒れており、固く、冷たく、思う通りには動かなくなっている。天の蓮の葉に勝る、柔らかい、… 、金色の仏陀の身体に、どのように触れる事ができようか。私は惨めである。やはり、触れようか。… 。

[Nr.24]

さて、私は何をしようか。(1)

(廣熾の) … 師仏陀の輝きに対して、(大きな)喜びを示す事によって、そして、大きな力を

⁵ この箇所は、*tārpāk parām ṅkāt* とあるが、*tārpāk* が不明なため、全体の意味を正しく理解できない。

有している … 行う事によって、彼の両手の荒れと冷えは消え去りました。そして、絹でできた … のように、柔らかく、愛らしい(両手)が彼に現れました。それを見て、陶師廣熾の心に、転輪王の如き大きな喜びが生まれ、その喜びの力によって圧倒され、師仏陀 … 、水を仏陀の徳でできた身体に注ぎました。すると、八万の(仏陀の)毛穴から、… (光が)出ました。それは、廣熾の身体に対して、右旋をし始めました。

|| … ||

… 。雷電、*kānkuk*⁶、*Śrīvatsa*、輝かしい特徴が、(仏陀の身体から、廣熾の)身体へと移っている。彼には、非常に強い、仏陀の徳に対する願望が生じました。1

それから、廣熾は、釈迦牟尼仏陀の(沐浴に対して)尊敬の念を示し、そして、仏陀が、それを受け、好ましく感じているのを知って、全身で、師仏陀の身体に対してひれ伏して、仏陀の徳に対する、勝るものない強い願望(を述べて、言います)。

|| *Watañilāntam* ||

この良き奉仕によって、この献身によって、私のこの願いが、(必ず)実現しますように、(そして、私が)、世界において(師となりますように)。同じ期間、全ての者にとっての避難所となりますように。同じような

[Nr.25]

… 、(釈迦牟尼という名前の)仏陀と同じような生まれで。私の父は、淨飯という名前の王でありますように。摩訶摩耶という名前の母、(耶輸陀羅と言う名前の妻)、羅怛羅という名前の息子、阿難陀という名前の侍者、舍利子と大目犍連という名前の、二人の優れた弟子が、(私には)おりますように。(1)

愛らしい声で、師仏陀は言います。立ちなさい、立ちなさい、息子よ。(あなたは、必ず)、その後、人々の命が(120)年に及ぶ時、釈迦牟尼・如来・阿羅漢・(正しく全ての)法を知る者・仏陀になるでしょう。あなたが抱いた願望のように、正に、そのように、必ず、… 。あなたは、世界の帰依する所、避難所として現れるでしょう。このように言うや、(大地が揺れました)。… 。

|| *Daśabalam* ||

花が空から降りました。… 。天の調べが聞かれました。天の光線が輝きました。天の(声が)聞かれました。この世界は、(今、帰依する所を得ました)。そして、将来の世代においても、釈迦牟尼仏陀らによって。(1)

大地(と空の全ての)生き物が、廣熾に誓いを立てました。あなたの願いは実現するでしょう。あなたの願いは実現するでしょう。決して、苦しみによって弱気になってはいけません。あなたは、釈迦牟尼と言う名前の仏陀として、(世界の帰依する所、避難所となるでしょう)。… 。1

それから、廣熾の父、母、妻、息子、… 。

⁶ Carling (2009: 109b) を参照。

2. パラレルについて

前節で和訳を与えたトカラ語 A «*Bṛhaddiyuti-Jātaka*» のパラレルとして、これまでに知られている範囲では、以下のものを挙げる事ができる。

[梵語]

Mahājātakamālā 第 4 章 «*Bṛhaddiyutikumbhakārāvadāna*»⁷

[漢訳仏典]

- 1) 「阿毘達磨大毘婆沙論」卷 177⁸
- 2) 「根本説一切有部毘奈耶藥事」卷 15⁹

[チベット仏典]

「根本説一切有部毘奈耶藥事」(Tibetan Tripitaka, Bd. 41: 221,5,2-222,1,4)¹⁰

これらのパラレルの内、漢訳「阿毘達磨大毘婆沙論」に見られるパラレルは、その他のものと比較し、*Ānanda* と *Bṛhaddiyuti* との会話に独特の記述を含んでいるだけでなく、この部分はトカラ語 A とも共通している。文体に関して見れば、トカラ語 A は、散文と韻文が交替する形式のものであり、全てが韻文で書かれている梵語や、殆どの部分が散文で書かれている漢語・チベット語のものとは大きく異なっているが、漢訳「阿毘達磨大毘婆沙論」に見られる叙述内容は、トカラ語 A のものとの一致度が高く、この点は注目される点であり、同一の伝承に由来する可能性を示していると推定される。

3. パラレルとの比較

本節では、前節で指摘したパラレルの内、漢訳「阿毘達磨大毘婆沙論」卷 177 に見られるパラレルとの比較を行うが、記述されている内容の大枠が一致している点を確認するため、最初に漢訳のテキストを引用する。以下の引用では、下線を付した部分は共通する記述である事を示している。

⁷ 梵語の校訂テキストとしては、Hahn (1985: 54-56) を参照。

⁸ 「阿毘達磨順正理論」卷 44、及び「阿毘達磨藏顯宗論」卷 24 にも、この物語についての言及が若干見られる。本論文末尾の[Text]を参照。

⁹ この部分は、次項に挙げるチベット語仏典に対応する箇所である。チベット訳と異なり、*Bṛhaddiyuti* という名前に言及しないなど若干の相違が見られるが、殆ど同じ内容と言える。

¹⁰ Straube (2009: 349-351) に拠る。同書には、チベット語原文だけでなく、ドイツ語訳も与えられている。また、*Bodhisattvāvadānakalpalatā* 第 100 章«*Punaḥprabhāsāvadāna*»に、この物語に対する言及が見られる点についても指摘されている (op.cit.287: Anm.4)。

「阿毘達磨大毘婆沙論」卷 177

「謂過去久遠人壽百歲時。有佛名釋迦牟尼。出現於世。生刹帝利釋迦種中。母名摩訶摩耶。父名淨飯。子名羅怛羅。城名劫比羅筏窰觀多諸釋種。侍者弟子名阿難陀。第一雙弟子名舍利子大目犍連。爾時世間五濁增盛。為生老死之所逼迫。愚癡盲冥無將導者。彼佛世尊以悲願力於中出現。精進增上化導有情未曾暫息。由如此故為風所薄。肩背有疾。時有陶師名曰廣熾。佛知時至即告侍者阿難陀言。吾今身疾不安。汝可往廣熾陶師家求胡麻油及煖水。為吾塗洗。侍者敬諾往陶師家。住廣熾前愛語問訊已。方便讚佛種種功德勝戒定慧。三十二相八十隨好圓光赫奕。智見無礙辯才無滯。復告廣熾。如是世尊若不出家。當為輪王王四洲界。我及汝等一切世間皆為僕使。然今棄捨如是王位出家苦行。得阿耨多羅三藐三菩提。具一切智見。斷一切疑網。施一切決定。能盡一切問論源底。視諸有情猶如一子。今者在此不遠而住。然為拔濟汝等苦故恒涉道路。為風所薄肩背勞積。須油煖水故相造詣。頗能施耶。爾時廣熾聞已踊躍歎未曾有。如何人間有是功德。即報尊者。仁今且還。我當如命自往佛所。其去未久。廣熾即辦生胡麻油及煖香水持往佛所。佛遙見之。為令彼人種善根故脫去餘衣。唯留襯身踞机而待。廣熾到已發淳淨心。以所持油恭敬善巧。塗佛肩背種種摩搦。復以煖水香湯灌洗。佛時風疾釋然除愈。以慈軟音慰喻廣熾。彼聞歡喜即發願言。願我未來當得作佛。名號眷屬時處弟子。如今世尊等無有異。當知彼陶師者即釋迦菩薩。由本願故今名號等如昔不異。」(T.27, no.1545, 891b28-892a3)

上で与えた引用によって、この部分が、梵文«Brhaddyutikumbhakāravādāna»のパラレルに相当しているだけでなく、トカラ語 A による物語と一致している点も窺う事ができよう。以下では、特に重要と思われる部分についてのみ指摘する。

[1] 人の寿命について

Toch.A: 120 歳

婆沙論: 100 歳

釈迦牟尼仏陀が、この世に現れる時代の人の寿命の長さが冒頭に与えられている。トカラ語 A 断片 Nr.19a1-2 では 120 歳とあり、「婆沙論」の記述とは異なっている。人の寿命を 120 歳とする記述は、Couvreur (1946: 608-609) が指摘するように、トカラ語 A 断片 Nr.255b1 (= THT888b1) にも見られるところである¹¹。一方、根本説一切有部の律典では、以下のよ

¹¹ トカラ語 A 仏典と同様に 120 歳とする説は、筆者が調べた漢訳仏典中では、以下のものが挙げられる。

「悲華經」卷 7

「世尊。惟願今者與我阿耨多羅三藐三菩提記。於賢劫中人壽百二十歲時成佛出世。如來應供正遍知乃至天人師佛世尊。」(T.03, no.157, 213a22-25)。

「大乘悲分陀利經」卷 5

「唯願世尊。授我阿耨多羅三藐三菩提記。於彼賢劫百二十歲世人中。我為如來應供正遍知明行足善逝乃至佛世尊。我能成辦如是佛事。」(T.03, no.158, 271b21-24)。

「大宝積經」卷 84

「過去無量無邊阿僧祇劫五濁世時。有佛出現號曰寶聚功德聲如來應供正遍知明行足善逝世

うに 100 歳としており、この二つの説が有部に知られていたと考えられるが、筆者は、現在のところ、有部文献中に 120 歳とする記述を見出していない。

「根本説一切有部毘奈耶出家事」卷 2

「我所修行梵行功德。以此善根。願迦葉波佛與彼嚕怛囉婆羅門。當來世時。人壽百歲。有佛出世。號曰釋迦牟尼應正等覺。十號具足。」(T.23, no. 1444, 1030, a4-7)

「根本説一切有部毘奈耶藥事」卷 10

「汝於未來世。人壽百歲時。成正等覺。號釋迦牟尼。」(T.24, no. 1448, 44, c26-27)

「根本説一切有部毘奈耶雜事」卷 30

「我於迦葉波如來無上等覺教法之中。至盡形壽修治梵行。所有善根如迦葉波佛授摩納婆。當來之世人百歲時。得成正等覺名釋迦牟尼。」(T.24, no. 1451, 356, b29-c3)

[2] 仏陀が *Brhaddyuti* に依頼した物

Toch.A: 温かい水と胡麻油

婆沙論: 胡麻油及煖水

梵語: *sarpis tailam guḍāmbhaś ca*¹²

藥事: 酥油蜜漿¹³

トカラ語 A と「婆沙論」は、仏陀が *Brhaddyuti* に依頼したものとして、「温かい水と胡麻油」を挙げており、その他のものとは異なっている¹⁴。「婆沙論」と根本有部の律が一致しない事から、有部には、二つの異なった話が伝えられていた可能性が推定される。

[3] *Ānanda* の発言

Toch.A: もしも彼が出家していなかったならば、彼は四洲の支配者・七宝を備えた転輪王となっていたでしょう。また、私もあなたも、(彼の)召使となっていたでしょう。

間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。時世壽命百二十歲。如我今日。彼諸眾生極重貪欲。」(T.11, no.310, 483b27-c2)。

「注維摩詰經」卷 3

「爾時佛未出世。後受命漸短人壽六萬歲。爾時拘留孫佛出世。乃至百二十歲時釋迦牟尼佛出現于世。自後漸短乃至人壽三歲。百二十歲已下盡名命濁也。彌勒生時小劫更始人壽更長也。」(T.38, no.1775, 360b3-8)。

¹² *Bodhisattvāvadānakalpalatā* 第 100 章《*Punaḥprabhāsāvadāna*》では、*snehair guḍodakais tena kṣaiṇye sampūjito jinaḥ* (Straube 2009: 187)とあり、相違が見られる。

¹³ チベット訳も、梵語と同様のものを列挙している。

¹⁴ 「阿毘達磨順正理論」卷 44、及び「阿毘達磨藏顯宗論」卷 24 は、「香油」「香水」の二つを挙げており、トカラ語 A・「婆沙論」に挙げる物と、ほぼ一致していると見られる。

今、彼は出家し、正しく全ての法を知り、全ての疑いを(追い払い、確信を与え)、全ての疑問を絶っています。[Nr.21a2-5]

婆沙論: 如是世尊若不出家。當為輪王王四洲界。我及汝等一切世間皆為僕使。然今棄捨如是王位出家苦行。得阿耨多羅三藐三菩提。具一切智見。斷一切疑網。施一切決定。能盡一切問論源底。 (T.27, no.1545, 891c13-18)

これは、*Ānanda* が *Brhaddiyuti* の下に赴き説得する際に述べた発言であるが、梵語・チベット語のものには見られない。ここでは、トカラ語 A と「婆沙論」の両者が共通の表現を使用しており注目される¹⁵。

4. 部派帰属について

トカラ語 A «*Brhaddiyuti-Jātaka*»は、そのパラレルが、説一切有部の論書である「阿毘達磨大毘婆沙論」や「根本説一切有部毘奈耶藥事」にも見られるだけでなく、特に前者との記述の一致が確認される事から、有部に知られていた伝承を素材にしたものと考えられる事ができよう。また、トカラ語 A のものが、有部と関係づけられる点については、上で指摘したパラレルの存在だけでなく、トカラ語 A に見られる以下の叙述も手がかりを提供する。

p[ɪ]ā(nā)kte ñom klyoṣṭhuneyā brhadyutis poṃtsām kapsiññā yok koc śmām [Nr.20a3-4]

「仏陀の名前を聞き、廣熾の全身の毛は逆立った。」

Cf. Skt. *tasya buddha ity aśrutapūrvam ghoṣam śrutvā sarvaromakūpāny āhrṣṭāni*

「仏陀という、これまでに聞いた事がない音を聞き、彼の全身の毛は逆立った。」

梵語・漢語仏典を調査した Hiraoka (2000) に拠れば、この表現は、有部文献に特有の表現とされており、同じ表現が、トカラ語仏典中にも見られる点は重要である。この表現からも、トカラ語 A の物語が、有部に伝えられた伝承に基づいている事が裏付けられる。

5. トカラ語 A の *Prachtstücke* のパラレルについて

トカラ語 A 断片 Nr.1-25 (= THT634-658) は、トカラ語 A 断片中、状態が最も良い連続したテキストである点から、トカラ語学では *Prachtstücke* と称されている。この写本の現存する部分の内、Nr.1-17 (= THT634-650) は、«*Punyavanta-Jātaka*»として知られている本生譚が語られ、本稿で検討した部分は、基本的には、それに続く物語として語られた部分である。この写本で語られている物語の漢訳仏典中のパラレルについては、季羨林 (1943) で指摘されているが、その後の研究によって明らかになったものを加えて列挙すると、以下のよう

¹⁵ Couvreur (1946: 601-605) は、トカラ語 A 断片 20b4-21a1 に見られる仏陀の epithet の比較も行っている。

に纏める事ができる¹⁶。

《Punyavanta-Jātaka》

「生経」卷3（「佛説国王五人経」）

1. 「大智度論」卷12・「大方便佛報恩経」卷4
2. 「長阿含経」卷6
- Śīlpavān: 「雑阿含経」1283 経¹⁷
4. 「根本説一切有部毘奈耶薬事」卷16

《Bṛhaddiyuti-Jātaka》

「阿毘達磨大毘婆沙論」卷177・「根本説一切有部毘奈耶薬事」卷15

以上に見るように、基本となる本生譚に、様々な仏典からの引用がはめ込まれる形で構成されている点から考えて、この写本は、梵語などのインド語による原典からの翻訳と言うよりは、むしろ、トカラ仏教の側での編集であった可能性が窺える。また、この写本が、筆者の主張するように、有部に属するならば、この写本に見られる物語が有部に知られていたと推定する事が可能であろう。

6. 結論

本稿では、トカラ語 A 《Bṛhaddiyuti-Jātaka》を漢訳仏典中のパラレルと比較し、説一切有部の論書である「阿毘達磨大毘婆沙論」との一致と、用いられている表現から、その部派帰属が説一切有部であり、Prachtstücke と称される写本が、この部派に伝えられた伝承に基づいて編纂されたと推定される点について論じた。この結論は、従来指摘されているトカラ語仏典の部派帰属と矛盾しない。また、有部文献に特有とされる表現が、トカラ仏教の側で編纂されたと見られる仏典にも用いられている点は、この表現の有部における重要性を示唆しているように思われる。

ところで、既に触れたように、この物語はトカラ語学で《Punyavanta-Jātaka》として知られている本生譚に続く物語であり、そこには、阿含經典からのものと見られる韻文の引用が見られた。そして、この韻文は、漢訳仏典中、根本説一切有部系とされる「雑阿含経」のものと良く一致している事から、この韻文が根本説一切有部の阿含經典から引用された可能性が存在している¹⁸。従来、トカラ語仏典の研究では、部派帰属に関して、説一切有部・根本説一切有部のどちらに属するかが議論されてきた。しかしながら、この問題について、筆者は、トカラ語律典に根本説一切有部の律典が見られる事から、どちらに属するのか、

¹⁶ ここでは、季 (1943) で指摘されているパラレルの一部を引用するに止めた。詳細については、季論文を参照。また、パラレルの前に付した番号は、季論文での分類に対応する。

¹⁷ 荻原 (2009a) を参照。

¹⁸ 荻原 (2009a) を参照。

ではなく、この両部派をまとめた広義の有部の中で、どのようにトカラ語仏典が位置づけられるのかという観点から研究されるべきである事を指摘した¹⁹。この問題意識に基づいて、筆者はトカラ語仏典と有部文献との突合せを行っており、本稿は、そうした研究の成果である²⁰。このような作業は、東トルキスタン有部の問題や有部全体の問題にも関係しており、より広い視座からの検討が必要である。今後も、この作業を継続してトカラ仏教の位置づけを考えたい。

参考文献

CARLING, Gerd, Georges-Jean PINAULT and Werner WINTER

2009 *Dictionary and Thesaurus of Tocharian A*. Volume 1: A-J. Wiesbaden: Harrassowitz.

COUVREUR, Walter

1946 Le caractère sarvāstivādin-vaibhāṣika des fragments tokhariens A d'après les marques et épithètes du Bouddha. *Le Muséon* 59: 577-610.

DSCHI, Hiän-lin 季 羨林

1943 Parallelversionen zur tocharischen Rezension des Puṇyavanta-Jātaka. *ZDMG* 97: 284-324.

ENOMOTO Fumio 榎本 文雄

1998 「根本説一切有部」と「説一切有部」『印度學佛教學研究』47-1: 400-392 (111-119).

2000 Mūlasarvāstivādin' and 'Sarvāstivādin. In: Ch. Chojnacki, J.-W. Hartmann and V. M. Tschannerl (eds.), *Vividharatnakaraṇḍaka: Festgabe für Adelheid Mette*. (Indica et Tibetica 37). Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag, 239-250.

2004 「根本説一切有部」の登場『神子上恵生教授頌寿記念論集 インド哲学佛教思想論集』神子上恵生教授頌寿記念論集刊行会、永田文昌堂: 651-677.

HAHN, Michael

1985 *Der Grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā). Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal. Nach Vorarbeiten von Gudrun Bühnemann und Michael Hahn herausgegeben und eingeleitet*. Wiesbaden: Harrassowitz.

HIRAOKA Satoshi 平岡 聡

2000 The Sectarial Affiliations of Two Chinese Saṃyuktāgamas. 『印度學佛教學研究』49-1: 506-500 [1-7].

LANG, Emmanuel

1912 La Mahajjātakamālā. *Journal asiatique*. Sér. X. Tome XIX, 511-550.

OGIHARA Hirotohi 荻原 裕敏

2009a 「トカラ語 A«*Puṇyavanta-Jātaka*»に於ける阿含經典の引用について」『東京大学言

¹⁹ 荻原 (2009b) を参照。

²⁰ 筆者は、最近、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 Nr.404 (= THT404) が、*Cakkavatti-sihanāda-sutta* に比定される事に気づいた。この断片については、Ogihara (forthc.) を参照。

获原 裕敏

語学論集』 28: 133-171.

2009b *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B* (unpublished doctoral dissertation. Paris, EPHE).

forthc. On a fragment of the *Cakkavatti-sihanāda-sutta* in Tocharian B. submitted to 『西域歴史語言研究集刊』 第四輯, 北京: 中国人民大学国学院西域歴史語言研究所.

SIEG, Emil

1944 *Übersetzungen aus dem Tocharischen I*, Berlin: Verlag der Akademie der Wissenschaften.

STRAUBE, Martin

2009 *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā. Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhaṭṭas Jātakamālā*. Wiesbaden: Harrassowitz.

T. = *Taisho Tripiṭaka*.

THOMAS, Werner

1964 *Tocharisches Elementarbuch. Band II: Texte und Glossar*. Heidelberg: Winter.

TochSprR(A) = SIEG, Emil and Wilhelm SIEGLING, *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte, A. Transkription; B. Tafeln*, Berlin-Leipzig: de Gruyter, 1921.

[Text]²¹

[1] 梵語

«Brhaddiyutikumbhakāra»

Cf. Hahn (1985: 54-56 [77-103])²²

tataś ca prācarat tatra śākyamuniḥ sa bhikṣubhiḥ |
saṅghaiḥ śārisutānandamaudgalyapramukhaiḥ saha ||
tatrāranye mahodyāne kṛtvā sattvahitārthatām |
saddharmaṃ samupādiśya vijahāra sasāṅghikāḥ ||
tadā tasya munīndrasya vajrakāye 'pi daivikam |
pavanābādhiḥ glānyam utpannam agnimanditam ||
tatra sa bhagavān matvā svadehe vātābādhitam |
ānandaṃ yatim āmantrya purata evam ādiśat ||
gacchānanda kulālasya brhaddiyuteḥ sakāsataḥ |
sarpis tailaṃ guḍāmbhaś ca yācitvā sahasānaya ||
iti śāstrā samādiśtaṃ śrutvānandas tatheti saḥ |
brhaddiyuteḥ kulālasya sahasā samupācarat ||
tatrānandaṃ tam āyātaṃ kumbhakāraḥ samīkṣya saḥ |
sahasothāya prāṇamya sāñjalir evam abravīt ||
bhadanta kuśalaṃ kac cid bhavatāṃ brahmacāriṇām |
yadarthe 'ra samāyāsi tat samādeṣṭum arhasi ||
iti tenoditaṃ śrutvā sa ānandaḥ samīkṣya tam |
kumbhakāram upāśritya saṃpaśyann evam abravīt ||
brhaddiyute vijānīya bhagavato jagadguroḥ |
yad vātābādhitam glānyam utpannam vīgrāhe 'dhumā ||
tad vātāśāntaye śāstuh sarpistailaguḍāmbubhiḥ |
prayojanaṃ tad etāni yācitum aham āvraje ||
tad dehi śraddhayā mahyaṃ sarpis tailaṃ guḍodakam |
etatpradānapuṇyais tvaṃ nūnaṃ saṃbodhim āpuṇyāḥ ||
iti tena samādiśtaṃ śrutvā sa kumbhakṛṇ mudā |
tathety abhyanumoditvā taṃ yatim evam abravīt ||
bhadantaitāni vastūni bhagavān sa yadīcchati |
tad ahaṃ sahasādāya saṃpradātum samācare ||
ity uktvā kumbhakāraḥ sa sarpis tailaṃ guḍodakam |
ādāya saha putreṇa tenāpi yatinācarat ||

²¹ チベット語仏典は、漢訳「根本説一切有部毘奈耶藥事」のものと、基本的には一致しているため、本稿ではパラレルを引用しない。

²² Lang (1912: 528-530 [梵語テキスト], 533-535 [仏訳]) も参照。

*tam ānandaṃ purodhāya saputraḥ sampramoditaḥ |
sahasā saṃcarams tatra vihāre samupāyayau ||
tatra taṃ śrīghanaṃ dṛṣṭvā kumbhakāraḥ sa sātmajaḥ |
dūrāt kṛtāñjalir natvā mudā paśyann upācarat ||
tatra sa sahasopetya tasya śāstuh padābjayoḥ |
praṇatvā tāni sarvāni purataḥ samadhaukayat ||
tāni sa bhagavān dṛṣṭvā kulālaṃ taṃ ca sātmajam |
suprasannāśayas tasmai sadā bhadraśiṣaṃ dadau ||
suprasannaṃ munīndraṃ taṃ matvā sa kumbhakṛn mudā |
tailena sarpiṣā śāstuh sarvāṅge 'mraḥṣayat svayam ||
guḍodakena sarvāṅge paryasiñcat samādarāt |
tad guḍāmbu ca pānāya pradadau saṃpramoditaḥ ||
tatas tena munīndrasya śāstuh saṃsvasthitā tanuḥ |
kṣamañiyatarā cābhūd yāpanīyatarāpi ca ||
tad dṛṣṭvā kumbhakṛc cāsau suprabuddhāśayāmbujah |
bhagavantaṃ sasaṅghaṃ taṃ yathāvidhi samarcayat ||
tataḥ sa muditaś cāsya śāstuh pādābjayor mudā |
sāñjaliḥ praṇipatyaiṅvaṃ manasā prañidhiṃ vyadhāt ||
anena kuśalenāhaṃ buddha īdṛgguṇākaraḥ |
īdṛkkulaprasūtaḥ syām īdṛglakṣmīsamṛddhimān ||
aham api tathā sarvaṃ samuddhṛtya bhavadadheḥ |
bodhimārge pratiṣṭhāpya cārayeyem jagac chube ||
ity evaṃ prañidhiṃ kṛtvā kumbhakāraḥ sa nanditaḥ |
bhagavantaṃ samīkṣyaiva tatraikānta upāśrayat ||*

[2] 漢訳仏典

《阿毘達磨大毘婆沙論》卷 177

「謂過去久遠人壽百歲時。有佛名釋迦牟尼。出現於世。生利帝利釋迦種中。母名摩訶摩耶。父名淨飯。子名羅怙羅。城名劫比羅筏窰觀多諸釋種。侍者弟子名阿難陀。第一雙弟子名舍利子大目犍連。爾時世間五濁增盛。為生老死之所逼迫。愚癡盲冥無將導者。彼佛世尊以悲願力於中出現。精進增上化導有情未曾暫息。由如此故為風所薄。肩背有疾。時有陶師名曰廣熾。佛知時至即告侍者阿難陀言。吾今身疾不安。汝可往廣熾陶師家求胡麻油及煖水。為吾塗洗。侍者敬諾往陶師家。住廣熾前愛語問訊已。方便讚佛種種功德勝戒定慧。三十二相八十隨好圓光赫奕。智見無礙辯才無滯。復告廣熾。如是世尊若不出家。當為輪王王四洲界。我及汝等一切世間皆為僕使。然今棄捨如是王位出家苦行。得阿耨多羅三藐三菩提。具一切智見。斷一切疑網。施一切決定。能盡一切問論源底。視諸有情猶如一子。今者在此不遠而

住。然為拔濟汝等苦故恒涉道路。為風所薄肩背勞積。須油煖水故相造詣。頗能施耶。爾時廣熾聞已踊躍歎未曾有。如何人間有是功德。即報尊者。仁今且還。我當如命自往佛所。其去未久。廣熾即辦生胡麻油及煖香水持往佛所。佛遙見之。為令彼人種善根故脫去餘衣。唯留襯身踞机而待。廣熾到已發淳淨心。以所持油恭敬善巧。塗佛肩背種種摩擽。復以煖水香湯灌洗。佛時風疾釋然除愈。以慈軟音慰喻廣熾。彼聞歡喜即發願言。願我未來當得作佛。名號眷屬時處弟子。如今世尊等無有異。當知彼陶師者即釋迦菩薩。由本願故今名號等如昔不異。」(T.27, no.1545, 891b28-892a3)

《根本說一切有部毘奈耶藥事》卷 15

「爾時勝光王復白世尊曰。最初於誰行施得證無上菩提。佛告大王。乃往古昔無量劫時。有城名曰毘訶彼地。其城有一陶輪工師。有佛出世。號曰釋迦牟尼。證無上正真等正覺。十號具足。亦有聲聞弟子。名舍利弗。大目乾連。及侍者阿難陀。時釋迦牟尼佛正真等正覺。共無量苾芻眾。俱遊行人間。至彼城中。爾時彼佛忽有風患。即告阿難陀曰。汝可往彼陶輪家乞酥油蜜漿。爾時阿難陀聞佛教勅。即往詣陶輪家。在門外立。白言長者。世尊患風強病。今須酥油蜜漿。時陶輪師。聞具壽阿難陀所說。即將酥油蜜等。長者共兒相隨。俱往佛所。以酥蜜等遍塗佛身。溫水沐浴。持沙糖水。奉上世尊。為療病故。即得痊愈。爾時陶師長跪發願。說伽他曰。

我以蘇蜜施如來	願獲廣大功德利
種族名號聲聞眾	悉如今日釋迦尊
善能調伏有情類	遠離眾苦歸圓寂

其陶輪子。亦發是言。願我當來如佛侍者。佛告大王。我於爾時。初施釋迦如來。得證無上菩提。其子者。即阿難陀是。」(T.24, no.1448, 73a28-b19)

《阿毘達磨順正理論》卷 44

「謂我世尊初發心位。逢一薄伽梵號釋迦牟尼。彼佛出時正居末劫。滅後正法唯住千年。時我世尊為陶師子。於彼佛所起殷淨心。塗以香油浴以香水。設供養已發弘誓願。願我當作佛一如今世尊。故今如來一一同彼。」(T.29, no.1562, 591b10-15)

《阿毘達磨藏顯宗論》卷 24 (5 辯業品)

「謂我世尊初發心位。逢一薄伽梵。號釋迦牟尼。彼佛出時正居末劫。滅後正法唯住千年。時我世尊為陶師子。於彼佛所起殷淨心。塗以香油。浴以香水。設供養已。發弘誓願。願我當作佛一如今世尊。故今如來一一同彼。」(T.29, no.1563, 889a1-6)

<訂正と追加>

筆者は、『東京大学言語学論集』28号に「トカラ語 A 《*Puṇyavanta-Jātaka*》に於ける阿含經典の引用について」と題する論考を発表したが、その後、吉田豊教授（京都大学）より、拙稿における誤りをご指摘頂くとともに、ソグド語仏典の関係箇所について、ご教示頂いた。ここに記して感謝申し上げますとともに、以下、筆者が気づいた「雑阿含經」1283 經の対応箇所と合わせて、訂正と追加を行いたい。

[訂正]

p.136: 英訳・第二韻文: alright → all right

第四韻文: Having received (well) with → Having been received (well) by

p.147: 第四韻文和訳「(良く)受ける者は」→「(良く)受け入れられる者は」

*第四韻文のこの箇所に見られる過去分詞は、漢訳のパラレルと比較して、能動ではなく受動と解釈の方が妥当であり、梵語の具格に対応するトカラ語 A の通格は、受動文に於ける動作主を表しているとは解釈される。トカラ語の過去分詞が受動の意味も表す点については、既に指摘されている。

p.147 及び p.161: 「雑阿含經」1283 經に於ける対応箇所

善友貴重人 敏密修良者 → 善友貴重人 敏密修良者

p.170: 梵語・トカラ語 A 対照語彙 *sukṛta-karman*:- aright → all right

[追加]

pp.154-155: トカラ語 A14a1-6 (= THT647a1-6)

引用した箇所内、「父・母」以下の部分は、ソグド語訳 *Daśakarmapatha-avadānamālā* の第五章《*Kāñcanasāra* 王物語》に類似の表現が見られる。この箇所を含むソグド語の写本は、断片であり詳細は窺えないが、トカラ語仏典、若しくは、西域北道で流布していた梵語仏典に基づいていると推定される。この断片については、以下の文献を参照。

SUNDERMANN, Werner

A fragment of the Buddhist *Kāñcanasāra* Legend in Sogdian and its manuscript. In: A. Panaino and A. Piras (eds.), *Proceedings of the 5th conference of the Societas Iranologica Europæa, Vol. 1: Ancient and Middle Iranian studies*. Milano 2006: 715-724.

On the school affiliation of the *Bṛhaddiyuti-Jātaka* in Tocharian A

OGIHARA Hirotschi

[Keywords]

Tocharian A, *Bṛhaddiyuti-Jātaka*, *Mahajjātakamālā*, Sarvāstivādin

[Abstract]

Tocharian A fragments Nr.19a1-25b6 (= THT652a1-658b6) discovered in the *Shorchuk* region tell the story called the *Bṛhaddiyuti-Jātaka* in the Tocharian study. The present article focuses on the elucidation of the school affiliation of this story in comparison with the parallel texts in Chinese and Sanskrit. Although the Sanskrit parallel text has already been pointed out by Emil SIEG (1944), the Chinese parallels have not been identified yet. According to my research, the Chinese parallel texts can be found in the literature belonging to the (Mūla-)Sarvāstivādin. Among them, only the Chinese text given in «阿毘達磨大毘婆沙論» *āpidámó dàpipóshālùn* (T.27, no.1545) gives the same description as that found in Nr.21a2-5 in the Tocharian A version. In addition, one can point out that the Tocharian A version also uses the cliché which is known to be specific to the literature of the (Mūla-)Sarvāstivādin: Skt. *tasya buddha ity aśrutapūrvam ghoṣam śrutvā sarvaromakūpāny āhr̥ṣjāni*. These facts confirm that the *Bṛhaddiyuti-Jātaka* in Tocharian A should be based on the tradition of the (Mūla-)Sarvāstivādin.

(おぎはら ひろとし)